

夏と秋の美学 鈴木其一と伊年印の優品とともに

根津美術館（南青山） 2024.09.14～10.20

『古今和歌集』において、四季のうち春と秋の歌は、夏と冬の歌より大きく上回ることに示されるように、日本では古来「春」と「秋」が好まれた。

この「春」と「秋」に対する偏愛は、季節が離れた「桜と紅葉」を取り合わせる作品をはじめとして、美術の世界でもよく見出されている。

そうした伝統を受け継ぎながら、江戸時代の美術には、春ではなく「夏と秋の組み合わせ」も目立ってきた。その背景に、夏の風情を好ましく思う感性があるのは間違いなく、旺盛な「夏」と衰えゆく「秋」を描くことは、季節の推移をくっきりと切り取るのにも寄与した筈であるとされている。

本展は、江戸琳派の異才「鈴木基一」と琳派の祖で「俵屋宗達」に始まる工房の優品を中心にして、美術作品によって初夏から晩秋まで移ろう季節の情趣を楽しみながら、そこにかがわれる美意識の諸相に迫るものである。



鈴木其一 《夏秋溪流図》

19世紀・紙本金地 6曲1双

檜の林と岩間を流れる溪流が連続する屏風に、山百合の咲く夏景と桜の葉が紅に染まる秋景が描かれている作品は、鮮やかな緑青や群青と金地の強烈な対

比、複雑な形の岩肌をねっとりアメーバのように這う水流、樹皮や百合の花、桜の葉の克明な描写に対して、極端に単純化された岩笹などである。



伊年印 《夏秋草図屏風》

17世紀 紙本着色 6曲1双

墨を多用して表された夏から秋にかけての草花が、露や地面でつなぎ合わされて穏やかな韻律を刻んでいる。夏景に咲き乱れる「山百合」と「鉄砲百合」が、これまでになく新鮮である作品である。